

メメント・モリ——死を想え

■選者紹介

押野武志 (おしの たけし)

北海道大学大学院文学研究院教授

【専攻】日本近代文学

■選者の著作

押野武志・横濱雄二・諸岡卓真・高橋啓太・井上貴翔編著『日本サブカルチャーと危機：死と恐怖の表象史』北海道大学出版会、2025 年

ミステリ、ゲーム、映画、アニメ、マンガなどにおいて、第二次世界大戦や東日本大震災などの実際に起きた「危機」、あるいは物語上のクローズドサークルや世界の終わりなどの架空の「危機」はどう扱われ、描かれてきたのか。危機表象についてのジャンル横断評論集。

定価：3,960 円（本体価格 3,600 円＋税）

ISBN：978-4-8329-3420-7



■選書リスト

01 伊藤計劃×円城塔著『屍者の帝国』河出文庫（河出書房新社）、2014 年

伊藤の第三長編として計画されていたが、冒頭の草稿を遺して伊藤がガンで早逝したため、生前親交の深かった円城が書き継いで完成させたもの。ヴィクター・フランケンシュタインによる屍体蘇生術が普及し、屍者が労働力・軍勢力として利用されている 19 世紀末の世界を舞台とする歴史改変 SF。実在の人物に加えて多くの有名なフィクションのキャラクターたちが、屍者と生者を隔てる「魂」とは何かを問う。

定価：858 円（本体価格 780 円＋税）

ISBN：978-4-309-41325-9

02 吉田裕著『日本軍兵士：アジア・太平洋戦争の現実』中公新書（中央公論新社）、2017 年

本書は、従来あまり取り上げられることのなかった、兵士の被服、糧食、体格、メンタルな面も含めた疾病の問題などに着目しながら、帝国陸海軍の軍事的特性が兵士にどのような負荷をかけたのかを、資料に基づいて具体的に明らかにしている。数字の客観性を踏まえつつ、230 万人という数字には還元されない兵士たちのひとつひとつの死へのこだわりも同時に提示している。

定価：902 円（本体価格 820 円＋税）

ISBN：978-4-12-102465-7

03 山口雅也著『生ける屍の死（上・下）』光文社文庫（光文社）、2018 年

1900 年代末、ニューイングランドの片田舎で死人が蘇る不可解な現象が起きる。そこに、スマイル霊園を営む一族の遺産騒動をめぐる奇妙な事件が絡む。一族のひとりで、自らも死者となったことを隠しつつ事件を追うパンク探偵グリーンが、肉体が朽ちるまでその真相に挑む。〈死者が蘇る可能性がある〉という条件下で殺人の必然性も問われる。死／生とは何かという哲学的・思弁的な問いを追求しようとしたミステリ。

〈上巻〉定価：858 円（本体価格 780 円＋税）

ISBN：978-4-334-77673-2

〈下巻〉定価：858 円（本体価格 780 円＋税）

ISBN：978-4-334-77674-9

04 押井守著『ゾンビ日記』ハルキ文庫（角川春樹事務所）、2015 年

狙撃手である「俺」が狙う標的は、〈死者〉である。世界は、「俺」を除いて〈死者〉たちが徘徊する廃墟となってしまった。このような奇妙な物語設定をもつ小説が、映画監督である押井守によって書かれなければならない必然性があった。これまでの視覚メディアによって描かれた〈死者〉への違和を表明しながら、「俺」を支えていた唯一の動機とは、〈死者〉をして「じゅうぶんに死なしめる」という認識だった。

定価：価格 616 円（本体価格 560 円＋税）

ISBN：978-4-7584-3919-0

05 藤田直哉著『新世紀ゾンビ論：ゾンビとは、あなたであり、わたしである』筑摩書房、2017 年

21 世紀のゾンビは、あの腐敗し緩慢な動作で人間を襲う「生ける死体」ではない。知能を持ち、人間相手にときめくこともある。キュートで可憐な美少女ゾンビも登場する。こうした変容は、何を意味しているのか。あるいは、なぜこんなにさまざまなゾンビたちがメジャーな存在となり、世界中で増殖を続けるのか。分断や隔離ではなく、共存や友愛を志向するゾンビに今日的な可能性を問う。

定価：1,980 円（本体価格 1,800 円＋税）

ISBN：978-4-480-84313-5

06 陸秋槎著／稲村文吾訳『文学少女対数学少女』ハヤカワ文庫（早川書房）、2020 年

高校 2 年生のミステリ好きの「文学少女」陸秋槎は、校内誌に載せる自作の「犯人当て小説」に穴がないかを見てもらうために、孤高の天才「数学少女」韓采蘆を訪ねる。彼女は、作者の意図した「正答」を出したうえで、作者さえ予想だにしない真相の「別解」を次々と導き出す。いずれも数学の有名な定理や概念を取り入れ、数学とミステリの類似点と限界を示しつつ、作中作と二人が現実で出会うさまざまな謎を解く全 4 編の連作集。

定価：1,056 円（本体価格 960 円＋税）

ISBN：978-4-15-184351-8

07 田村隆一著『ぼくのみステリ・マップ：推理評論・エッセイ集成』中公文庫（中央公論新社）、2023 年

戦後のミステリ普及に大きな足跡を残した翻訳者・編集者であると同時に、戦後詩をリードした詩人でもある田村隆一。本書には、両ジャンルの戦後の展開を主導した田村の貴重な証言・名作解説などが多数収められている。「一篇の詩を生むためには、／我々はいとしいものを殺さなければならない」（詩「四千の日と夜」）としたら、ポエジーの探究者＝探偵としての田村は、同時にかけがえないものを殺す犯人でもあったのだ。

定価：1,320 円（本体価格 1,200 円＋税）

ISBN：978-4-12-207323-4

08 香川雅信著『江戸の妖怪革命』角川ソフィア文庫（角川学芸出版）、2013 年

妖怪が、現在のようなかわいいキャラクターとしての妖怪になるまでに、近世と近代において二度大きな妖怪観の転換があったという。逆に幽霊は、近代以降リアルなものとして特権化されていく。妖怪が自然に対する畏怖に関わるものであるのに対して、幽霊は人間に対する恐怖に関わるものだからだ。容易に幽霊を「見てしまう」不安定な存在、謎めいた「内面」を抱え込んでしまった近代人は、自らが「不気味なもの」となる。

定価：968 円（本体価格 880 円＋税）

ISBN：978-4-04-408320-5

09 竹内康浩・朴舜起著『謎ときサリンジャー：「自殺」したのは誰なのか』新潮選書（新潮社）、2021 年

サリンジャーの小説「バナナフィッシュ」にうってつけの日」のラストは、主人公の拳銃自殺とされてきた。だがそれは本当に「自殺」だったのか。他殺の可能性はないのか。死の現場には主人公の弟もいた。果たして死んだのはどちらなのか。謎は解かれるとは限らない。曖昧な結末にこそ、サリンジャーの死生観が宿っているという。竹内康浩著『謎ときエドガー・アラン・ポー：知られざる未

解決殺人事件』(新潮選書／ISBN：978-4-10-603923-2)もおススメ。

定価：1,870 円 (本体価格 1,700 円＋税)
ISBN：978-4-10-603870-9

10 北出栞著『「世界の終わり」を紡ぐあなたへ：デジタルテクノロジーと「切なさ」の編集術』太田出版、2024 年

「世界の終わり」と「大切な誰かとの関係」が同じ重みをもって描かれるさまざまな〈セカイ系〉作品を再評価し、デジタルテクノロジーを通じた世界とのつながりの中で、現実世界から切断される感覚としての「切なさ」のありかを問う。社会が描かれていないと揶揄されてきた〈セカイ系〉に、誰かを傷つけるような、根本的な破滅に至る手前で踏みとどまらせる倫理を見る。

定価：2,200 円 (本体価格 2,000 円＋税)
ISBN：978-4-7783-1926-7

11 坂爪真吾著『男子の貞操：僕らの性は、僕らが語る』ちくま新書 (筑摩書房)、2014 年

これまで男性は、女性の身体を通してしか、自分の性を語ることができなかったという。男性が自らの性を語り、自らの性を決めるためには、どのようなスキルが必要なのか。本書が提供するのはそのようなスキルであり、男性の「セクシュアル・リテラシー」を向上させることが目指されている。そうした性の自己語りを通して、女性や子ども、障害者など社会的な弱者の問題が、男性自身の問題として浮上する。

定価：880 円 (本体価格 800 円＋税)
ISBN：978-4-480-06764-7

12 赤田祐一・ばるぼら著『定本 消されたマンガ』彩図社、2016 年

本書は、作者の意志とは無関係に、何らかの外的要因で市場から「消されたマンガ」を 60 タイトル以上取り上げて解説する。「有害作家」第一号は、手塚治虫だった。『拳銃天使』(1949)のさりげないキスシーンが子供マンガ史上、「エロ漫画」「子供の敵」と問題視され、物議をかもしたという。この時期は「青年」というカテゴリがまだ存在せず、「大人」と「子供」というカテゴリが明確に区別されていたという指摘は面白い。

定価：763 円 (本体価格 694 円＋税)
ISBN：978-4-8013-0145-0

13 山口晃著『ヘンな日本美術史』祥伝社、2012 年

本書は、現代の視点から遡行的に整理された日本美術史ではなく、「その時代からどうなるか分からない未来を見据えた視線を一生懸命想像する」視座から書かれたものである。そして、そのような線条的な歴史観から自由になることは、西洋画のような写実的なデッサンや遠近法に慣れてしまった私たちの鑑賞法から自由になることでもある。実作者としての技術論に根ざした、いい意味で「ヘンな」日本画の可能性が示されている。

定価：1,980 円 (本体価格 1,800 円＋税)
ISBN：978-4-396-61437-9

14 田村景子著『希望の怪物：現代サブカルと「生きづらさ」のイメージ』笠間書院、2023 年

本書は、特撮、アニメ、マンガ、ホラー小説、ライトノベルなど日本のサブカルチャーに潜む怪物たちが発する予兆や警告を聴取しながら、その危機に処するための方策とかなかな希望を差し出す。怪物というおぞまじきもののたちの表象が、私たちの内面や現代社会の諸問題を映す鏡ともなっていることを明快に描き出す。怪物たちは、今日のさまざまな「生きづらさ」のメタファーとして可視化される。

定価：1,980 円 (本体価格 1,800 円＋税)
ISBN：978-4-305-70976-9